

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：32634

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K21377

研究課題名(和文) スポーツ少女マンガにおけるジェンダー表象研究

研究課題名(英文) Gender representation research in sports shjo manga

研究代表者

押山 美知子 (OSHIYAMA, MICHIKO)

専修大学・文学部・兼任講師

研究者番号：90398719

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は少女マンガ誌に掲載されたスポーツする少女を主人公とする作品(以下、スポーツ少女マンガ)の盛衰を明らかにすることを目的に、六〇年代から八〇年代までのスポーツ少女マンガを取り上げ、ヒロインの表象をジェンダー批評の観点から分析し、その歴史の変遷を検証したものである。国会図書館所蔵の主要少女マンガ誌12誌を調査し、六〇年代の80作、七〇年代の374作、八〇年代の231作の計685作について分析した結果は以下の通り。1. 七〇年代まではスポーツと人生が一体化したヒロインが多く描かれ、身体描写にもリアリティが求められた。2. 八〇年代はヒロインにとってのスポーツの重要度が低下し、楽しむ姿勢が見られた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the sports shjo manga from the 1960s to the 1980s with the aim of clarifying the rise and fall of the work which the main character of a sports girl posted in shjo manga magazines. I analyzed the representation of the heroine from the viewpoint of gender criticism and examined the historical transition. I investigated 12 major shjo manga magazines in the National Diet Library and analyzed the total of 685 works of 80 works in the 1960s, 374 works in the 1970s, 231 works in the 1980s, the following was found out. 1. Until the 1970's, many heroines were integrated in which sports and life integrated, and reality was required for depiction of the body. 2. In the 80's, the importance of sports for the heroine declined, and attitude to enjoy was seen.

研究分野：少女マンガ・現代日本文学・ジェンダー

キーワード：少女マンガ スポーツ ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

(1) 博士論文で少女マンガを代表するヒロイン像の一つである〈男装の少女〉のジェンダー表象について分析した後、「戦う」少女を描くという共通性を持つスポーツ少女マンガに関心を持った。スポーツ少女マンガは、八〇年代半ばまでは、コンスタントに人気作が描かれながら、その後は数を減らし、現在ではほぼ描かれなくなっている。スポーツ少女マンガは何故描かれなくなったのか、七〇年代に一世を風靡したスポーツ少女マンガとはどのような特徴を持ち、どのようなヒロインが描き出されていたのか、ジェンダー批評の観点から分析を試みたいと考えた。

(2) スポーツマンガに関する研究は、夏目房之介『消えた魔球-熱血スポーツ漫画はいかにして燃えつきたか』（双葉社、1991年）や米沢嘉博『戦後野球マンガ史-手塚治虫のいない風景』（平凡社、2002年）などの評論や、高井昌吏『女子マネージャーの誕生とメディア-スポーツ文化におけるジェンダー形成』（ミネルヴァ書房、2005年）等の社会学の分野で主に先行していた。また、山田夏樹『ロボットと〈日本〉-近現代文学、戦後マンガにおける人工的身体の表象分析』（立教大学出版会、2013年）には、梶原一騎・川崎のぼる『巨人の星』に関する論考が収められている。しかしながら、それらはいずれも少年マンガのスポーツものを中心に取り上げ、少女マンガのスポーツものについてはほとんど触れられていない。研究対象としては未開拓と言っても過言ではない、少女マンガのスポーツものに関する研究を少しでも進めたいという思いもあった。

2. 研究の目的

(1) 本研究の当初の目的は、六〇年代から八〇年代にかけて描かれたスポーツを主題とする日本の少女マンガを取り上げ、スポーツする少女の表象をジェンダー批評の観点から分析し、その歴史的変遷を明らかにすると共に、同時代の活字媒体（新聞・雑誌）による現実の女子スポーツ選手の取り上げられ方との比較を行い、両者の関連性について考察するというものであった。六〇年代後半から七〇年代にかけて黄金期を迎え、八〇年代後半に衰えをみせるスポーツ少女マンガの盛衰とスポーツする少女像の変遷、及び活字媒体における女子スポーツ選手の表象の移り変わり

との相関関係について検証するという目論見があった。

(2) スポーツ少女マンガは、所謂「スポ根」マンガが全盛であった六〇年代後半から七〇年代前半にかけて、現実の女子中高生たちに巻き起こったスポーツブームの発生源であった。空前のバレーボールブームを巻き起こした浦野千賀子の『アタック No. 1』

（「週刊マーガレット」1968年1号～1970年50号）、テニス部に新入部員が殺到するきっかけを作った山本鈴美香「エースをねえ！」（「週刊マーガレット」第一部1973年2・3号～1975年7号、第二部1978年4・5号～1980年8号）等が挙げられる。この当時のスポーツ少女マンガは、単に現実の女子スポーツや女子スポーツ選手の「媒介者」に留まらず、現実の女子スポーツに直接的に作用する力を備えていたと考えられる。その観点からすると、スポーツ少女マンガにおけるスポーツする少女像の変遷を明らかにする本研究は、当時の現実の女子スポーツ選手のあり方を逆照射することになるのではないかと考えられた。

また、現実の女子スポーツや女子スポーツ選手は、活字媒体などを介して語られるものであるが、その語られ方や扱われ方がスポーツ少女マンガにどのような影響を与えたのかについても考察を行うことで、メディアとスポーツの関係性に新たな知見がもたらされるであろうと予測した。

3. 研究の方法

(1) 国会図書館所蔵の少女マンガ誌主要12誌（講談社：「なかよし」「少女フレンド」「別冊フレンド」、小学館「ちゃお」「少女コミック」「別冊少女コミック」、集英社：「りぼん」「週刊マーガレット」「別冊マーガレット」、白泉社「花とゆめ」「LaLa」、秋田書店：「ひとみ」）にあたり、主人公の少女がスポーツを行う作品（ここで言う「スポーツ」とは、五輪種目に該当する競技を中心に、剣道や薙刀等の武道、プロレスやローラーゲーム等のプロスポーツを含む。また、少女がスポーツを行う描写を研究対象としたことから、マネージャー等の裏方、もしくは指導的立場に位置づけられるものは除外した）について、10項目（1. 連載年月、2. 掲載誌名、3 作者名、4. スポーツ種目名、5. 主人公の年齢・性格、6. 容姿造形

の特徴、7. 身体的特徴、8. 運動能力及び必殺技の内容、9. 家族・ライバル・恋人の有無及びその内容、10. 読者の反応) のリストを作成し、年代ごとの傾向について考察を進めた。

(2) また、国会図書館所蔵の六〇～七〇年代(1967-1979)の一般週刊誌の調査を行った。「週刊新潮」「週刊文春」「週刊現代」の3誌に絞り、現実の女子スポーツ選手を扱った記事にあたり、その内容分析を行った。

4. 研究成果

(1) 六〇年代の80作品、七〇年代の374作品、八〇年代の231作品、計685作のスポーツ少女マンガを分析し、得られた成果は以下とおりである。

まず、作品数の推移であるが、1969年(55作)と1970年(73作)の二年だけで全体の約19%にあたる128作品が描かれていたことが判った。1969年の前年の1968年が15作であることを考慮すると急激な増加と言えるが、1968年には浦野千賀子『アタックNo.1』(「週刊マーガレット」1968年1月7日号～1970年12月13日号)及び神保史郎・望月あきら『サインはV!』(「週刊少女フレンド」1968年10月15日号～1970年12月22日号)の連載が開始されており、圧倒的な人気を獲得したこの二作が牽引することで、スポーツ少女マンガブームは始まったと捉えられる。1971年に48作品、1972年に47作品が描かれた後、1984年までは30作前後の作品数で推移していた。1986年以降は十数作品に激減し、1989年は6作品のみとなった。

(2) 次に掲載誌の割合について、六〇年代(80作)は「なかよし」「週刊少女フレンド」「少女コミック」「りぼん」「週刊マーガレット」「別冊マーガレット」の六誌のみで、「少女コミック」(25作)と「週刊マーガレット」(23作)の二誌だけで全体の60%を占めていた。少女マンガ誌の創刊が相次いだ七〇年代(374作)には掲載誌が十二誌と倍増するが、「少女コミック」(113作品)と「週刊マーガレット」(60作品)の二誌が占める割合は46%と引き続き高く、六〇年代から七〇年代にかけて、「少女コミック」と「週刊マーガレット」という週刊誌二誌が、スポーツ少女マンガの隆盛を作りだ

していたとみることができる。この要因としては、一般的に勝敗の結果がクライマックスとなるスポーツは、毎回次号への「ひき」が求められる週刊連載において、ドラマを作りやすいモチーフとして重宝されたためと考えられる。

八〇年代(234作)に入ると、掲載誌の割合は「週刊マーガレット」(37作)、「別冊少女コミック」(37作)、「ちゃお」(33作)の順となり、六〇年代から七〇年代にかけて最もスポーツ少女マンガを掲載していた「少女コミック」が、四番目の24作品と著しく数を減らした。これは、同誌が1978年に週刊から月2回に刊行形態を変えた影響と見られる。「少女コミック」に代わり、同誌の出版社である小学館の月刊誌(「ちゃお」「別冊少女コミック」)が上位を占め、集英社と小学館の少女マンガ誌が引き続きスポーツ少女マンガを牽引したことに変化は無かった。

(3) 七〇年代にスポーツ少女マンガを多く掲載していた「少女コミック」と「週刊マーガレット」にはスポーツものを専門的に描くマンガ家があった。「少女コミック」には灘しげみ(六〇年代に6作、七〇年代に7作)やひだのぶこ(七〇年代に12作)、田中美智子(六〇年代に3作、七〇年代に7作)、すなこ育子(七〇年代に7作)が、「週刊マーガレット」には浦野千賀子(六〇年代に3作、七〇年代に9作)や藤原栄子(六〇年代に5作、七〇年代に4作)、志賀公江(七〇年代に5作)や木内千鶴子(六〇年代に3作、七〇年代に1作)がスポーツ少女マンガを相次いで発表し、個々に人気を集めていた。これらのマンガ家たちは、いずれもストーリーテラータイプであり、尚かつ「動きや迫力、肉体を感じさせる、スタイル画ではない『絵』」¹をもつという点に共通性が見られた。

八〇年代においても、「週刊マーガレット」の津村かおり(7作)と麻生泉(5作)、「別冊少女コミック」の田村由美(4作)等がスポーツ少女マンガを複数作描いていたが、七〇年代に比べると特定の作家のみが描くという傾向は薄れた。

(4) 掲載形態をみると、六〇年代の80作中20作、七〇年代では374作中95作が連載作品(前後編は除き、三回以上のものとした)

であり、共に全体の25%に過ぎない。この当時のスポーツ少女マンガは、読み切り作品が大半であったと言えるが、これは先に指摘したように、スポーツものは物語を構成し易く、更には様々な身体の動きを描く必要があることから、主に新人マンガ家が技術向上のために編集からの要請で描かされるケースが多かったことが一因として挙げられるのではないか。一方、八〇年代の231作中、連載作品の数は77作で、全体に占める割合は33%と七〇年代の25%より増加した。

(5) 題材となったスポーツについては、六〇年代は18種目(表1)、七〇年代は40種目(表2)、八〇年代は28種目(表3)が確認できた。上位を見ると、六〇年代は1. バレーボール(13)、2. テニス(11)及び陸上(11)、3. 水泳(8)、4. 卓球

(6)、七〇年代は1. テニス(41)、2. 陸上(34)、3. バレーボール(33)、4. バasketボール(29)及び水泳(29)、八〇年代は1. テニス(47)、2. バレーボール(29)、3. 陸上(27)及びバasketボール(27)、4. 剣道(14)の順に並び、バレーボールとテニス、陸上が人気種目となっていたことが分かった。その内、バレーボールとテニス(及び水泳)は、いずれも谷口雅子『スポーツする身体とジェンダー』(青弓社、2007年)で指摘されている、明治後半から大正期にかけて近代スポーツが女子学生へ浸透していく際に、「女性にふさわしい」(谷口・前掲書p90)スポーツとして推奨された種目である点に着目したい。バレーボールについては、無論1964年の東京オリンピックにおける「東洋の魔女」の活躍が色濃く影響していることも確かだが、敵陣に侵入せず、身体接触も無く、スポーツするヒロインが自陣でのプレイに徹するこれらの競技が、スポーツする女性キャラクターに「女性らしくする」²ことを優先的に求めた当時の少女マンガの中で、とりわけ好ましいスポーツと見なされていたであろうことは想像に難くない。すなわち、少なくとも六〇年代後半の少女マンガのヒロインにとってスポーツは相容れない、更に言えば、スポーツは男性性を表す象徴的なモチーフであり、ヒロインが行うにふさわしくないものであったと言え、実際にスポーツ少女マンガを描くにあたっては、ヒロインがスポーツをすることで「女性らし」さを損なうことのないよう、様々な制約

が課せられていたとみることができる。時代が進むに連れ、これらの制約も緩和されていくことになるが、六〇年代後半に花開いたスポーツ少女マンガは、限定的なスポーツの導入を出発点としていたことを明記しておく。

種目名	作品数
バレーボール	13
テニス	11
陸上	11
水泳	8
卓球	6
ソフトボール	5
スキー	4
フィギュアスケート	3
体操	3
バスケボール	3
柔道	2
フェンシング	2
野球	2
ハンドボール	2
バドミントン	2
馬術	1
シンクロナイズドスイミング	1
レーサー	1

(表1) 六〇年代スポーツ少女マンガの題材となったスポーツ種目

競技名	作品数
テニス	41
陸上	34
バレーボール	33
バスケボール	29
水泳	29
体操	24
フィギュアスケート	23
剣道	19
卓球	17
野球	16
スキー	14
ソフトボール	12
柔道	10
サッカー	9
ボウリング	8
バドミントン	8
スピードスケート	5
馬術	4
複数競技	4
高飛び込み	3
空手	3
ハンドボール	2
ゴルフ	2
アーチェリー	2
プロレス	2
水上スキー	2
ヨット	2
新体操	2
フェンシング	2
ローラーゲーム	2
ボート	1
ボクシング	1
少林寺拳法	1
ダイビング	1
アメリカンフットボール	1
スカイダイビング	1
スケート	1
弓道	1
権力	1
ラグビー	1
シンクロナイズドスイミング	1
レーサー	1

(表2) 七〇年代スポーツ少女マンガの題材となったスポーツ種目一覧

種目名	作品数
テニス	47
バレーボール	29
陸上	27
バスケボール	27
剣道	14
フィギュアスケート	12
体操	8
水泳	7
バドミントン	7
サッカー	7
野球	6
卓球	5
ソフトボール	5
新体操	4
空手	4
柔道	4
プロレス	3
スキー	2
モトクロス	2
ボクシング	2
ハンドボール	2
軟式テニス	1
長刀	1
ラグビー	1
合気道	1
馬術	1
アイスダンス	1
ローラースケート	1

(表3) 八〇年代スポーツ少女マンガの題材となったスポーツ種目一覧

(6) 六〇年代から八〇年代にかけてのスポーツ少女マンガのヒロイン像を、ジェンダー批評の観点から分析すると以下のようなことが言える。まず、六〇年代から七〇年代においては、父性的な指導者に導かれ、異性と距離を置き、スポーツに全身全霊を捧げて様々な困難を乗り越え、勝利を掴む、スポーツと人生が一体化した少女主人公像が、読者にとって憧憬の対象となり、現実のスポーツへの参入を促す契機ともなって、編集部側も積極的にその流れを後押ししていた。先述のとおり、題材が特定の競技に偏りがちであり、勝敗以上に自己表現に重きが置かれ易く、主人公は男性指導者へ依存しがちで、プロになる、すなわちスポーツによって経済的に自立する姿は求められない等、男性主人公を描くスポーツ少年マンガに比べ制約の多いものであったが、試合という戦いを制して勝ち上がる女性主人公は、それまでの典型的な少女マンガのヒロイン像である「やさしく美しくおとなしいだけの少女に強さとたくましさを加え」³た点で画期的であった。七〇年代後半には、女子プロレスをテーマにした作品（志賀公江『青春ファイター』「少女コミック」1977年11月13日号～1978年4月23日号）が登場したり、通常、女性美が評価されがちなペアスケートを取り上げながら、男性依存から脱し、表現者としてペアの男性と対等に並び立つ女性主人公を描いたり（槇村さとる『愛のアランフェス』「別冊マーガレット」1978年1月号～1980年9月号）と、スポーツする女性の描写は、より強く、より自立的な存在へと変化した。

身体表象については、六〇年代から七〇年代半ばまではバレーやバスケットの選手でも背が高いといった競技に有利な身体描写はほとんど見られず、平均的な身体描写に留まるが、七〇年代後半の長期連載作品の中には丸みを帯びた女性的な身体描写からアスリートとしての筋肉質な身体描写への移行が見受けられるものがあつた。

八〇年代に入るとヒロインにとってのスポーツの重要度は低下し、異性との恋愛に重きが置かれる傾向が強まった。例えばフィギュアスケートを題材にした田中雅子『虹色のトレース』（「ひとみ」1978年9月号～1981年1月号）では、主人公は訳あって離ればなれになった恋人とペアを組むことを目標に練習に励み、実力をつけていくものの、恋人との再会で物語の幕は閉じられ、二人がペアを

組んでから後の競技生活は描かれていない。七〇年代後半の競技者としての自立という志向性が弱まり、恋愛関係の成就が最優先事項となった。言うなれば、スポーツは恋愛物語の演出装置の一つになっていったのである。

更に、七〇年代までの熱血スポーツものをパロディ化する作品が多く現れた。湯沢直子『翔んでるルーキー！』（「週刊マーガレット」1979年4月8日号～1981年5月29日号）や川原泉『銀のロマンティック…わはは』（「花とゆめ」1986年3号～7号）は、前者はバレーボール、後者はペアフィギュアスケートと、七〇年代までの熱血スポーツマンガの定番種目を題材に、ギャグ要素を多くとり入れ、競技に対し真剣にとりくみつつも肩の力の抜けた、スポーツとの適度な距離間を保つヒロインを描いた。スポーツに過度に入れ込まないという点では、これもまた先述したスポーツの重要度低下の現れとみることもできよう。

また、男性キャラクターにも変化が見られた。すなわち、主導的な男性指導者が減り、ヒロインを脇で支える男性キャラクターが多く描かれる傾向があつた。例えば新体操を題材にした麻生泉『光の伝説』（「週刊マーガレット」1985年7月5日号～1988年9月20日号）のヒロイン・光は、七〇年代後半に見られたスポーツを通して自らの表現を極める自己確立を果たすアスリートとして描かれるが、その対となる男性キャラクターは、光を導く体操選手の前輩ではなく、光の伴走者となる同級生である。父親や兄のように上位の立場からヒロインをスポーツの世界へ引き上げ、彼等の理想という鑄型に嵌められるのではなく、対等な立場で切磋琢磨しながらスポーツと向き合い、最終的には互いに表現者同士という形で結ばれる。このようなスポーツを巡る新しい男女の関係は七〇年代後半のスポーツ少女マンガから徐々にその傾向が見えていたが、八〇年代に入り、より顕著となつていった。

(7) 分析対象となるマンガ作品が予想以上に多く、考察に時間がかかってしまったため、新聞・雑誌の調査は一般週刊誌「週刊新潮」「週刊文春」「週刊現代」の3誌に絞り、現実の女子スポーツ選手を扱った記事（六〇年代73本・七〇年代127本）にあたり、その内容分析を行った。特徴としては、試合内容やプレイスタイル以上に性格及びコ

一チやチームメイト、親兄弟や恋人との人間関係といったプライベートな部分に焦点を当てる傾向が強く、容姿や体型（身長・体重）について多く言及され、「美しい」「かわい子ちゃん」「色気がある」という観点から評価されていた。しばしばグラビア頁に全身像が掲載され、中には身体部位を強調し、性的な身体性を写し出すものも見られた（『週刊文春』17巻17号〔1975年4月〕p10-11

「女子プロテニス大会」等）。また、「東洋の魔女」以降、世界的に活躍する女子選手は「女はますます強くなりました」（『週刊新潮』12巻32号〔1967年8月〕p21）というように「強い」ことが揶揄の対象となっている傾向が見られる点から、女子選手が華々しい成績を残すことは必ずしも全面的に肯定され、また評価されることではなかったと捉えられる。読者及び記事を作成する側が男性中心であったことを踏まえれば、当時の一般週刊誌においては、女性が男性領域とされてきたスポーツの世界で活躍し、強くなることはどちらかと言えば嫌悪され、女子選手を性的対象と見なし“女”として一般化することで、男性の優位性を保持する嫌いがあったと考えられる。

そのような一般週刊誌における現実の女子スポーツ選手の取り上げられ方を踏まえると、スポーツ少女マンガのヒロインは、独自且つ特異な発展を遂げたと言えよう。読み手も書き手も男性中心の一般週刊誌とは対照的に、読み手も描き手も女性中心の少女マンガにおいて、スポーツは、まずヒロインを強くするものとして描き出され、後に男性依存から脱却し、ヒロインの自立を可能にするモチーフとなった。八〇年代に入るとスポーツの重要度は低下するが、それは別の見方をすれば、スポーツを介さずとも女性が強くなれたり、自立できたりする時代の到来を示唆していたとも捉えられるのではないか。少なくとも、六〇年代から八〇年代半ばにかけて、ス

ポーツ少女マンガは、様々な制約を課せられる形で始まりながら、徐々に少女の身体と精神の可能性を限りなく拡大してみせる、少女たちをエンパワーメントする物語へと発展していったと見ることができるのである。

(8) 本研究により、研究対象としてほぼ未開拓と言ってよい状態にあったスポーツ少女マンガの実態が、作品数の推移、掲載誌の割合、マンガ家の傾向、題材となったスポーツの種類、ヒロインのジェンダー表象の特徴を通して、一部明らかとなった。しかしながら、現実の女子スポーツ選手の表象分析にまで至らなかった点、また何故スポーツ少女マンガが衰退したのかについては、明確な見解を得られなかったことから、これらについては今後の課題となる。本研究がスポーツマンガやスポーツするキャラクターの更なる研究の発展に何らかの形で寄与することができれば幸いである。

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計1件)

- ① 押山美知子「六〇年代から七〇年代のスポーツ少女マンガにみるヒロイン像ージェンダー批評の観点に基づく表象分析から」日本スポーツとジェンダー学会第15回記念大会、2016

[図書] (計1件)

- ① 飯田貴子／熊安貴美江／來田享子編著、ミネルヴァ書房『よくわかるスポーツとジェンダー』、2018、68～69

6. 研究組織

(1) 研究代表者

押山 美知子 (OSHIYAMA, Michiko)
専修大学・文学部・兼任講師
研究者番号：90398719

¹ 米沢嘉博『戦後少女マンガ史』ちくま文庫2007年8月p186

² 『アタックNo.1』の作者である浦野千賀子は、「女性漫画で初めてスポーツものを描くということで不安視もされる中、女性らしくする等の条件でOKが出ました。」（「あしたのジョー+エースをねえ！+ア

タックNo.1+巨人の星=スポコン展！図録』2015年8月、朝日新聞社、p46）と述べており、六〇年代後半のスポーツする女性キャラクターに向けられたジェンダー・バイアスが窺い知れる。

³ 米沢・前掲書p188